NICU留学記

2009年3月より，神奈川県立こども医療センター新生児科では全国の若手医師を対象とした「新生児医療のための短期有給研修医制度」をスタートさせました．本コーナーでは，この研修に参加した若手医師の奮闘の様子を紹介します．

留学生：中島一恵
群馬県立小児医療センター
→神奈川県立こども医療センター

研修期間：2009年7月1日～2009年9月25日

第2回：一人でも多くの赤ちゃんを受け入れるために

8月に入り，研修生活も1カ月が過ぎました．だんだんと病棟業務にも慣れてきたころ，夜間緊急帝王切開で出生した27週の超低出生体重児の主治医になりました．生後数日間は人工呼吸管理を含めた呼吸循環管理を行い，呼吸状態が安定して無呼吸発作が減少した生後1カ月時に転院してもらうことになりました．ここでは，急性期を乗り越えたら転院になる可能性があることを入院時にすべてのご家族にお話しし，承諾を得ています．転院の多さに最初は驚きましたが，県内の重症な赤ちゃんを1人でも多く受け入れるためには必要だと痛感するようになりました．ご家族も転院のときに嫌な顔をすることは少なく，「ベッドを譲ることは，次の赤ちゃんを救うために必要なこと」という，「お互い様」の意識を持ってくれているような気がします．退院まで見届けられないのはちょっぴり寂しいですが，退院したあと元気な顔を見せてくれた方もおり，嬉しい再会となりました．

スタッフの先生方は，新生児科の中でもサブスペシャリティを持っています．胎盤病理・母乳が専門の大山先生には，「胎盤を見に行きますか？」と声をかけていただき，時間があるときには胎盤所見を教授いただきました．胎盤を見る習慣はありませんでしたが，実際に見てみると，さまざまな発見がありました．気道疾患が専門の星野先生には気管支ファイバーを，胎児診断が専門の川滝先生には胎児エコーを，神経が専門の柴崎先生には脳低体温療法などを教授いただきました．私の指導医でもある循環管理が専門の豊島先生には，超低出生体重児の超音波検査や急性期の循環管理について教えていただきました．神奈川県立こども医療センターの超低出生体重児管理の特徴は，脳室内出血などの予防のために急性期はモルヒネで鎮静し，wall stressなどのエコー評価を行いながら心臓にストレスをかけない管理を目指していることです．超低出生体重児の急性期循環管理は私の研修目標でもあり，他施設の管理方法を知ることができ，とても興味深かったです．

●留学記録　新生児科の中でもサブスペシャリティを持った先生方に細やかなご指導をいただきました．